

合水堂・華岡流外科顕彰碑と 近畿大学医学部図書館華岡流医療機器資料室

竹中 裕昭

竹中医院

はじめに

かつて大坂中之島に存在した華岡流医塾である合水堂は、約2200人という華岡流医師の半数を育て、緒方洪庵の適塾(適々斎塾)と人気を競っていたが、その史跡は失われ、一般市民にはその史実もほとんど知られていない。しかしながら第116回日本医史学会学術大会が大阪で、また第29回日本医学会総会が関西で開催されたことを機に、合水堂と華岡流外科を顕彰する記念碑が、日本医史学会と華岡青洲の弟・鹿城の末裔である華岡家春林会との共同で大阪市中央公会堂付近に建立され(図1)、平成二十七年(2015年)四月二十五日(土)に除幕式が執り行われた(図2)。主催者の日本医史学会小曾戸洋理事長、日本麻酔科学会外須美夫理事長、第29回日本医学会総会2015関西小泉昭夫展示副委員長、華岡家春林会五十嵐慶一代表の他、来賓として土屋裕弘大阪商

工会議所ライフサイエンス振興委員会副委員長、橋爪紳也大阪市特別顧問も挨拶される華やかな式典となった(図3)。

ところで合水堂・華岡流外科顕彰碑建立以前から、大阪狭山市にある近畿大学医学部図書館の二階閲覧室の一角に華岡流医療機器資料室がある(図4)。通常は非公開であるが、医学部のオープンキャンパス開催時等に見学者に公開されている(図5)。

今回、合水堂・華岡流外科顕彰碑除幕式と、2015年度第1回目の近畿大学医学部オープンキャンパス開催時に「病院・キャンパス探検ツアー」という企画の一部として華岡流医療機器資料室を訪れる機会に恵まれたので報告する。

なぜ近畿大学に華岡流医療機器があるのか

近畿大学にある華岡流医療機器は、合水堂で学んだ華岡門人、中村順助が使用したものである。中村順助は駿河國岡部在内谷村(静岡市南西)の出身で、安政四年(1857年)に合水堂に入門。



図1 2015年(平成27年)に完成した合水堂・華岡流外科顕彰碑



図2 合水堂・華岡流外科顕彰碑の除幕式

合水堂顕彰碑除幕式のご案内

華岡青洲が全身麻酔「通仙散」を創成し、文化元年（1804）、世界で初めて全身麻酔による乳がんの摘出手術に成功したことは、世界的に有名です。その後、青洲末弟の鹿城によって分塾「合水堂」が大坂に開設され、日本中から門人が集まり、華岡流医学塾として隆盛を極めました。今は忘れられています。

2015年（平成27）は、華岡鹿城の跡を継いだ華岡南洋の没後150年にあたり、また日本医学学会総会が関西で開催される機会に、大阪市様のご協力を得て、合水堂の跡地である中之島に顕彰碑を建立し、歴史的に日本の医学の中心であった大坂を後世に伝えたいと思います。

建立にあたり、以下のように除幕式を行いますのでご案内申し上げます。

記

日時：2015年4月25日(土) 9:00~9:30

場所：大阪府大阪市北区中之島1丁目1 大阪中央公会堂前
 ○京阪電車中之島線「なにわ橋」1番出口
 ○地下鉄御堂筋線/京阪電鉄「淀屋橋」駅下車 1番出口から徒歩約5分
 ○地下鉄御堂筋線/京阪電鉄「北浜」駅下車 22号出口から徒歩約6分

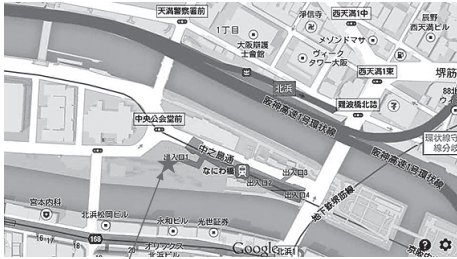
式次第：

1. 建立者挨拶

・日本医史学会	理事長	小曾戸 洋
・日本麻酔科学会	理事長	外 須美夫
・第29回日本医学学会総会2015関西展示副委員長		小泉昭夫
・華岡家春林会	代表	五十嵐慶一
2. 来賓挨拶

・大阪商工会議所	副会頭	
・田辺三菱製薬株式会社	代表取締役会長	土屋裕弘
・大阪市都市魅力戦略推進会議	会長	橋爪紳也
3. 除幕

* 16:30 より日本綿業倶楽部で行われるシンポジウム「華岡青洲の時代」にもご参加ください。



顕彰碑建立場所・除幕式会場

図3 日本医史学会会員向けの合水堂顕彰碑除幕式のご案内（最終版）

華岡南洋に医術を学び、七年後、駿河に帰国している。順助の死後、その医療器具は長らく中村家の家宝として受け継がれてきた。そして昭和五十二年九月（1977年）、これらの手術器具が大阪市立博物館で開催された「江戸時代の科学技術展」に出展されたのを機に、近畿大学が中村家から譲り受けたそうである。近畿大学の世耕政隆前総長が華岡青洲と同じ和歌山出身の医学者で、故郷の偉人である華岡青洲の業績や人柄に深い畏敬の念を抱き、華岡流医療機器を医学教育に役立てようとしたからと言われている。当初は東大阪市にある近畿大学の本部に保存されていたそうである

が、年月を経て、その使用法もわからなくなってきたものを、大阪狭山市の医学部に移設し、安富正幸名誉教授がそれらの使用法を解明し、医学部図書館の二階閲覧室の一角に設置されるようになったとのことである。

近畿大学医学部図書館が所蔵する 華岡流資料

1) 外療道具価附

華岡青洲が文化元年（1804年）、世界で初めて全身麻酔を用いた乳癌手術に成功すると、その名声を聞きつけた患者や門弟が日本全国から青洲の



図4 華岡流医療機器資料室がある近畿大学医学部図書館（資料室は入口をいって向かって左側にある）

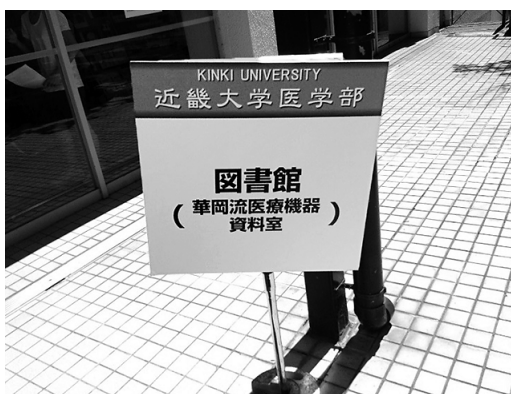


図5 医学部オープンキャンパス開催時等に公開される華岡流医療機器資料室

下に殺到した。青洲は門弟のために京都寺町六角南入にあった鍛冶屋の真龍軒安則に外科器具の作製を依頼した。門弟はその器具を使用しながら技術を習得し、故郷に帰って医業を続けた。中村順助が使用した医療機器は、現在、和歌山県立医科大学が所蔵する青洲自身が使用した機器と酷似していると言う。近畿大学所蔵の機器の中には、青洲考案といわれるコロンメスやバヨネット型曲剪刀なども含まれていた。これらの所蔵品も真龍軒安則が製造したものである。「外療道具価附」は三十五種類の手術器具についての価格が付けられているもので、青洲の最初の乳癌手術から程なく華岡流医療機器が商品化され普及したことが推察される。

2) 華岡流薬箱、薬籠、薬袋

華岡流医療機器資料室には、中村順助の薬箱もあり、通仙散を構成する烏頭・当帰など麻酔用の薬草も見出すことができた。通仙散麻酔は含有成分の急性中毒状態、すなわち中枢神経の抑制作用を利用したものと考えられているが、麻酔および覚醒に、それぞれ半日も要していたようである。薬袋に書かれている「医・唯・活・物・窮・理」の文字は薬物の分類記号として用いられているが、この言葉は青洲の哲学ともいえる「医は唯活物窮理に在り」に由来するものとされる。

3) 中村順助日記

近畿大学医学部図書館華岡流医療機器資料室には、順助が入門から研修生活、交友関係などについて克明に記した日記である「中村順助日記」も展示されていた。「安政四年十二月九日岩間氏にて猿解体」「モヅグチ・ノミ各一本購入」など医学に関する内容から、「つきやいにてぜんざい」「道頓堀角芝居見物」など順助のプライベートの内容も含まれ、当時の華岡流門下生の生活を知る上でも貴重な資料と言えよう。

中村順助が学んだ合水堂

この中村順助が学んだ合水堂は、堂島川と土佐堀川の間位置する大阪中之島のかつての東端「山崎の鼻」にあったことが知られている。江戸時代の中之島東端には備中成羽藩の蔵屋敷があり、その藩主が山崎主税助義厚であったことからその場所が「山崎の鼻」と呼ばれるようになった。上流からの土砂の堆積による砂州が鼻水のように伸びた様子は「山崎の鼻が風邪引いた」と面白おかしく言われていたようで、やがて観月などで賑わう景勝地となり、明和四年（1767年）頃に新地が造成され、「かぜひき新地」と呼ばれたそうである。明治九年（1876年）にその上流部の埋め立てが行われ、中之島の東端は浪華三大橋の一つである難波橋の上流にまで達した（現在の「ばらぞの橋」西側）。ここが明治二十四年（1891年）に大阪市初の市営公園、中之島公園として整備され、更に大正十年（1921年）に行われた大川の浚渫で

出た土砂の埋め立てにより中之島は天神橋を超えて現在の形状となり、その東端は剣先と呼ばれるようになった。さて、江戸時代の中の島東端、いわゆる「山崎の鼻」は大川（旧淀川）の流れが二つの川に分かれる場所であるが、当時、川上に架かる難波橋からみると、流れが緩やかな二つの川が合流しているように見えたことから、そこにある医塾を「合水堂」と名付けたといわれる。梅檀木橋より上流は、すべて山崎の鼻と称されていたようで、中之島尋常小学校創立六十五年・中之島幼稚園創立五十周年記念会編の「中之島誌」（昭和12年）では、梅檀木橋の近くに合水堂医院があったとの記載が見られる。

合水堂から全国へ

中村順助以外にも、合水堂で学んだ門弟の資料は各地に残されている。合水堂の知識を島根に広めた大森泰輔・加善の古医学書は、現在、島根大学附属図書館の大森文庫として残っている。豊前国中津藩医の傍ら医塾を開き、多くの門人を育てた大江家五代目雲澤も合水堂で麻酔術を学んだ一人で、「華岡青洲所診画帳」などその所蔵品は現在、大江医家史料館（大分県中津市）に残されている。

忘れられゆく華岡流の功績

華岡青洲は、アメリカ・シカゴ市の国際外科学

会の榮譽館（Hall of Fame）に日本人として初めて遺品が飾られた世界の医学史的にも偉大な医師であるが、徳川御三家の紀州藩主からの招聘を辞退し、一医師としてその生涯を患者の治療に捧げている。そして明治時代になると、西洋知識礼讃のため、江戸時代以前の国内の偉業には極端に関心が薄れていく。この時期に散逸した記録も少なくなき、次第に一般市民の記憶から華岡流の功績は忘れ去られていく。今回、近畿大学医学部の「病院・キャンパス探検ツアー」の参加者で、父兄を含め誰ひとり青洲のことをご存知の方がいらっしゃらなかったことは寂しい限りである。合水堂にしても、旧陸軍関連施設に地籍があったことなどから、今回、顕彰碑が建立されるまではその痕跡すらとどめていなかった。土佐堀川対岸にある適塾とはまさに対照的である。しかしながら中之島に新たな碑が建立されたということで注目を浴びているようで、SNS（social networking service）上では、碑の建立を機に一般市民のブログなどでも合水堂や華岡青洲のことが登場している。

近畿大学医学部にも、せっかく他には類を見ない多数の華岡流医療機器を揃えているのだから、保存上の問題などの制約があるかもしれないが、常設展示で一般市民にも気軽に偉人の業績に触れることができるようにしていただくことを期待したい。